

## 符禺の山と彭衛・馮夷など：羌族の跡をたずねて

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 川上 義三   |
| 雑誌名 | 中国文化：研究と教育：漢文学会会報   |
| 巻   | 39  |
| ページ | 1-13  |
| 発行年 | 1981-06-27  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15068/00149330">http://doi.org/10.15068/00149330</a> |

# 符禺の山と彭衙・馮夷など

——羌族の跡をたずねて——

山海経の中に散見する「符禺之山」類似の語としては、山経に符惕山(西三)、踰禺山(東二)、白於山(西四)、浮玉山(南二)、篇遇山(中一)、浮戲山(中七)、海経に務隅山(外北)、附禺山(荒北)、白玉山(内東)、鮪魚山(内東)などがある。

魚・虞・模・遇などの韻をもつこれらの語は、符禺―白於 *po yu* を原型音としている。即ち *p-p*―*b*―*m* と、さらに *m* を連ねた音をもつ (*f-f*―*y*―*w*) は唐末から五代にかけて生じた声母である。この *poi* *po yu* の音をもつ語は、非漢民族たとえば氐羌とよばれたものの称呼とかかわるのではなからうか。藏族の自称(唐代)は「蕃」・「播隅」、白馬人の自称(現在)は「貝」という<sup>①</sup>。

華陽国志<sup>3</sup>に見える「彭亡」という地名について、大清一統志<sup>309</sup>眉州条によれば、「彭蒙―彭望―彭亡―彭模―彭女」と「平望―平無―平模」の音転を記している。この語は「符禺」につながるものと考えられる。

## 川 上 義 三

西山経の首に、華山の山なみ一九山の中に符禺山がある。山海経では太華山、少華山の西に位置せしめられているのに、水経注では太華山、南山の東におかれている。これは校定の結果であるが、やはり山海経の旧にもどすべきだと考える。水経注で少華山の西においた升山、糧余山は、もともと洛水の項におくべきものを、渭水の項にもつて来たものであるし、その西の石山の「敷水」、さらにその西の「馬嶺山」は、符禺山―符禺水と重なりあう可能性があり、敷水は符禺水に音近く、馬嶺山もともと羌族の居住にかかわる白馬、馬嶺などの地名と同じである。

以上のことは別稿で取扱ったので、ここではその詳細にはふれない<sup>②</sup>。この稿で主として論じたいのは、「符禺山」とかかわると思われる彭戲氏―彭衙と河伯馮夷などについてである。

### (一) 彭戲氏―彭衙

後漢書西羌伝には、諸戎と殷・周・秦との交渉を次のよ

うに記している。

及平王之末、周遂陵遲。戎逼諸夏、自隴山以東、及乎伊・洛、往往有戎。於是渭首有狄・獯・邽冀之戎、洛川有大荔之戎、渭南有驪戎、伊・洛間有揚拒・泉臯之戎、潁首以西有蠻氏之戎。

平王の末年から諸戎が夏に逼り、雍・豫・冀の各地に侵入したとする伝統的な觀念に立った記述であるが、羌姓四國は、白川靜氏の所説のように、早く周王朝と深くかかわっていたと考えねばなるまい。

史記秦本紀によれば、秦は、寧公以來、積極的に東進の策をとっている。寧公二年（前714）平陽（郿県）に都するや、「兵を遣して蕩社を伐ち」、三年には「亳と戦い、亳主は戎に奔る。遂に蕩社を滅ぼし」、十二年には「蕩氏を伐つてこれを取つて」いる。司馬貞素隠によると「西戎之君、号曰亳王、……其邑曰蕩社」とある。

寧公の死後、太子武公において出子が立てられたりして三父の勢力が強かったが、武公が即位するや、その不安な情勢にも拘らず、武公元年（前697）には「彭戲氏を伐つて華山下に至つて」いる。三年に三父を誅して政権を確立した後、十年には邽・冀戎を西に討ち、十一年には東に進出して「初めて杜・鄭を県にした」。

説文によれば「亳、宀兆杜陵亭也」とあり、先に滅ぼされた亳王の杜の故地は、蕩氏が取つていた。また、秦は彭戲氏を伐つて華山の下に至るとあるから、もと鄭の故地であつたのを彭戲氏が取つていたことになる。その杜・鄭を今や秦は県にして勢力範圍にくみ入れたのである。

この彭戲氏について、正義に「戲、音許宜反、戎号也。蓋同州彭衙故城是也」とあるように、彭戲氏は西戎であり、彭衙城に拠つていたと思われる。

次に、「彭衙」の名の見えるのは、左伝文公二年（前625）であつて、経に、

春王二月甲子、晋侯及秦師戰于彭衙。秦師敗績。

とあるのがそれである。秦本紀では繆公（穆公）三四年（前606）のこととする。杜注に「馮翊郿陽県西北有彭衙城也」という。

左伝によれば、僖公三三年（前627）春二月、滑に侵入した秦に対し、晋は姜戎を語らつて夏四月穀に秦を攻め、孟明視ら秦の三将をはじめ多くの捕虜を得て大勝した。秦はこれに報いるため晋を攻撃した。

（伝）二年春、秦孟視帥師伐晋、以報殺之役。二月晋侯禦之、……甲子、及秦師戰于彭衙、秦師敗績。

晋の勝機は、狼蹕が死処を求めて彭衙の秦の陣に突入し

たことにある。

及彭衙既陳、以其屬馳秦師死焉。晉師從之、大敗秦師。この場合、文面では必ずしも明確でないが、彭衙は秦の所領であつたように思われる。

秦伯（穆公）は、なお孟明視を用いて国力の充実に努めた。

文公二年冬晉先且居・宋公子成・陳轅選・鄭公子帰生、伐秦取汪、及彭衙而還。

汪は同州府澄城県界に在り、彭衙は兩国界から遠くないようであつて、「彭衙に及んで還る」というのは、深入しなかつたことをいうのであろう。

史記晋世家によると、獻公二五年（前652）、晋が翟を伐つた時の記事に

「當時晉疆、西有河西与秦接境、北辺翟、東至河内。とあり、晋の勢力は河西に及んでいた。また左伝僖公一五年（前645）、秦の穆公が晋の惠公を虜にした時、

路秦伯、以河外之列城五、東尽虢略、南及華山、内及解梁城。既而不与。

というように、惠公を返還してもらうために画策している。杜注に「河外、河南也。東尽虢略、從河南而東尽解梁城今河東解県也。華山在弘農華陰縣西南也」とい

う。陸渾の居る所が虢略であり、虢州は河南、陝州靈宝県の地である。解梁城は山西省、蒲州府臨晋県東南一八里解城がそれであるという。秦が彭戲氏を伐ち華山の下に至り、鄭を県としたというその地であり、秦も河南に進出し、晋も河西、さらに華山にその勢力を及ぼしていたのである。

左伝閔公二年（前660）には、犬戎が渭汭、即ち渭水の黄河に入るところ、華陰県界、に進出した事実を、記している。

二年春、虢公敗犬戎于渭汭。

また僖公二年（前658）には、同じく虢公が戎を桑田、即ち陝県に破つたことを記している。この「戎」は、閔公二年の犬戎のことであらう。杜注に「桑田、虢地也、在弘農陝県東北也」といふ。犬戎は幽王を驪山で殺したことで知られているが、なお渭洛、河南に存在していたわけである。

この洛水 downstream には大荔戎も居つたことが知られており、秦本紀に

厲共公十六年（前461）遼河旁、以兵二万伐大荔、取其王城。

といっているのを見ると、かなりの勢力を持っていたよう

である。集解に「徐広曰、今之臨晋也、臨晋有王城」とい  
い、正義には「荔、音戾。括地志云、同州東三十里、朝邑  
東二十步故王城。大荔近王城邑」といい、大荔王城の位  
置を示している。

史記六国表によると、同じ年に、

塹河旁、伐大荔、補龐戲城。

と見える。この龐戲城は、彭戲城であり、ここでは明らか  
に秦の領有である。大荔戎を伐つと同時に彭戲城を補修す  
るということは、大荔に備えるためであったのだろうか。  
さらに、六国表には、

靈公十年（前415）補龐城、城籍姑。

と記す。龐城は龐戲城である。秦本紀、靈公一三年（前418）  
に「城籍姑」とあり、正義に「括地志云、籍姑故城、在同  
州韓城東北三十五里」とあるから、これは晋に備えたので  
ある。彭戲城即ち彭衙の地は、秦の領地として確保され  
ていたのである。このように彭衙、白水県の地は、洛水下  
流の要地で、あるいは諸戎と争奪をくりかえし、また晋と  
も争奪をくりかえしたのである。

後漢書西羌伝では、当時の情況を次のように記してい  
る。

是時義渠大荔最強、築城數十、皆自称王、至周貞王

八年（前411）秦厲公滅大荔取其地。趙亦滅代戎、即  
北戎也。韓・魏復共稍并伊洛、陰戎滅之、其遺脫者  
皆逃走、西隕汧・隴、自是中国無戎寇、唯余義渠種  
焉。

さて、春秋の彭衙は、漢の衙県の地であり、今同州の白  
水県である。

地理志、郡国志ともに左馮翊に「衙」をあげている。史  
記によれば、秦文公は清水を分けて白水県を置いた、彭衙  
城の故地は今県の東北六〇里に在り、古城がある。要する  
に、彭戲氏の拠った地に彭戲即ち彭衙城がおかれ（戲と衙  
は音通）、龐戲とも龐ともいわれ、降っては衙とよばれた  
わけである。白水県の名称は、彭衙水になむ白馬水ある  
いは、白水によったのであろう。四川省北部の今の白馬人  
は、白馬氏の後裔といわれるが、その居住地には白馬と名  
づける山や川が多い。また彼らの自称は「貝」、プイであ  
って、西藏族の唐代の自称、「番」、また「播隅」は、符禺  
山の「符禺」に通じ、それはここに見る彭衙に通ずるもの  
と考えると、これら地名はいずれも氏羌にかかわるものと  
推定される。

ところで、この彭衙という地名はすでに周初の金文にも  
見える。周はもと邠、即ち豳のあたりにいたらしく、やが

て南下して渭水のほとりに移り、殷を滅ぼして後は、宗周、今の西安の地に都した。周初の小孟鼎には鬼方征伐が見え、宣王期には玁狁征伐が見える。玁狁は涇洛二水の間を南侵してきたと思われる。兮甲斐<sup>⑧</sup>にいう。

維五月月既死霸庚寅、王初各伐玁狁于富虜。

この富虜は金文の罽柔で、王国維<sup>⑨</sup>は彭衙の初字とする。罽は罽(音浮)で彭に通ずる。虜は魚で、古、魚・吾二字は同音とされる。兮甲の兮は氏、甲は名、字は吉父で尹吉甫のことである。これは、今本竹書紀年、宣王五年夏六月、尹吉甫が玁狁を伐つて太原に至ったという記事と関連する。玁狁が彭衙に拠っていたのを伐つたのである。この時玁狁がただ彭衙の地まで南下しただけなのか、それともこの地に拠っていたため彭衙と名づけられたのかは、明らかでないが、おそらくこの地は玁狁の居住地になっていたであろう。

宣王十二年に作られた虢季子白盤(郿県出土という)に、「玁狁を洛の陽に薄伐す」といい、虢季子の北征を記したものである。(郭沫若は、洛水は南流するので、北洛水の東と見る)不嬰<sup>⑩</sup>殿によれば、白氏(虢季子白であろう)が不嬰、駘方に命じ、西方に玁狁を追撃させている。「車を以て玁狁を高陵に宕伐す」とあるが、王国維は高陵を涇水

の下流今の涇陽にあてる。

小雅出車は、この玁狁征伐を歌ったもののように、

己命南仲、往城于方、出車彭彭

旂旐央央 天子命我 城彼朔方

赫赫南仲 玁狁于襄(撰)(第二章)

朔方に対して于方と言ったのであろう。第四章で「西戎」とあるのは玁狁をさすと考えられる。今本竹書紀年では帝乙の三年、南仲に命じ昆夷を拒ぎ、朔方に城かしむとあるが、これは詩小雅の事に当るとすれば、昆夷は玁狁であり、西戎に属する。かれらが涇洛の間を占めておったと考えられるのである。

小雅采芣も、征旅の兵を恋うる妻子がその無事を祈る詩であって、「玁狁の故に啓居するに違あらず」(第一章)と嘆き、「豈日日に戒めざらんや、玁狁孔<sup>⑪</sup>棘<sup>⑫</sup>」(第五章)と戒め、玁狁の勢威がおそれられている。

「玁狁」の称については、史記匈奴列伝索隱に応劭・風俗通を引いて、「殷の時には獯鬻<sup>⑬</sup>という」といい、また、晋灼は、「堯の時は葷粥<sup>⑭</sup>といい、周には獯鬻<sup>⑮</sup>といい、秦には匈奴<sup>⑯</sup>という」と記す。孟子梁惠王下に「大王は獯鬻に事<sup>⑰</sup>う」とあり、また「文王は昆夷に事<sup>⑱</sup>う」とあり、毛詩序には「西に昆夷の患あり、北に獯鬻の難あり」と、西の昆夷

と北の獫狁を並べ称している。

後漢書西羌伝も「文王、西伯となるや西に昆夷の患あり、獫狁の難有り、遂に戎狄を攘うてこれを戍る、実に服せざるはなし」と記し、逸周書にも「文王立ちて西は昆夷を距ぎ北は獫狁に備う」と記し、昆夷と獫狁を方角によって區別しているように見える。しかし、獫狁を北方におくのは問題がある。

蒙文通氏の言うように、詩の「混夷」は「犬夷」（説文引）と、記され、史記の「緄戎」は「吠戎」（漢書）と記され、鄭説も「吠夷は混夷なり」という。犬戎は即ち昆夷である。かれらは西戎であつて、後の羌は犬戎の族である。王国維は鬼方・昆夷・獫狁を同一族と見、かつ周器に獫狁の名の見えるのは宣王の世であつて、それ以後は見えないという。

このように、彭衙の地とかかわるものとしての獫狁は、宣王の時に存在するが、獫狁は羌族に属し、彭衙の名もそれにちなむと見たいのが、筆者の考えである。降つて秦の武公の時、彭戲氏を伐つて華山に至るとある場合も、彭衙によつたから、彭戲氏とよばれたというのではなく、彭戲氏も羌族に属することがその名称から知られるし、また「華山」の西に「符禺山」があり、それは一つづきと考え

られることからして、彭戲氏—彭衙—符禺山（華山）のつながりを考えることができるのではないか。

符禺山は、少華山の西（寰宇記では鄭県の西南一〇〇里、方輿紀要では華州の西南四〇里）にあるとされている。秦本紀によると、武公元年、彭戲氏を伐ちて華山下に至り、一一年、初めて杜・鄭を県にし、秦は東方に領土を拡げた。括地志によれば、下杜故城は長安県の東南九里に在り、もと亳王の属邑であつたが、亳王が秦に伐たれて後、蕩氏の邑となつてのを取つて県とした。鄭県の地は、もと宣王が弟鄭桓公を封じた土地という。彭戲氏を伐つて華山下に至るとは、正に鄭の封地を攻め、遂に取つて県としたわけである。

華山の下が彭戲氏の地であるとすると、その連山の符禺の山もかわりを持ち、その他これに類する地名が散見することもうなづかれるが、さらに周の幽王が「戲」で死んだということも思い合はされてくる。以下このことについてふれてみよう。

周本紀に「申侯怒、与緄・西夷・犬戎攻幽王、……遂殺幽王驪山下。」と記し、秦本紀は「西戎・犬戎与申侯伐周、殺周王酈山下。」と記し、鄭世家も「犬戎殺幽王於驪山下」

と記し、いずれも幽王を酈山の下で殺した点では一致している。

ところが、國語魯語上は「幽滅于戲」と記し、竹書紀年（左伝昭公26年疏引）は「伯盤与幽主俱死于戲」と記し、水経注19渭水、酈県の条には「幽王實于戲、酈桓公死之」と記す。これに対し、國語韋昭注は「戲、戲山、在西周也」  
といい、周本紀正義は

括地志云、驪山在雍州新豊県南十里。土地記云、驪山  
即藍田山。

という。ここに幽王の死んだ所について、戲山・驪山の二名が出てきたわけであるが、水経注19では「秦始皇は墓を麗戎之山に營む、一名藍田」と記し、また「犬戎至、……遂敗幽王於戲水之上、身死於驪山之北。故國語曰、幽滅于戲也」と記す。「戲」を、韋昭は戲山とし、水経注は戲水とするが、戲山は戲水と、驪山は驪戎とかかわるのであるう。

漢書地理志、京兆尹に「新豊驪山在南、故驪戎國、秦曰驪邑」とある。水経注19渭水の条では、（戲水）東北流又北逕麗戎城東。春秋晋獻公五年伐之、獲麗姬於是邑、麗戎男國、姬姓、秦之麗邑矣」と記し、新豊（驪邑）に麗戎があり、驪戎男國があったという。

史記十二諸侯年表、晋獻公五年（前672）に「伐驪戎得姬」とあり、晋語には「獻公伐驪戎、克之、滅驪子、獲驪姬」  
とあり、立以為夫人」と記し、韋昭注に「驪子、驪戎之君也、本爵男、此云子者猶言男子也」  
といい、左伝莊公二八年伝に、「晋伐驪戎、驪戎男女以驪姬」とあり、杜注に「驪戎  
在京兆新豊県、其君姬姓、其爵男也」とある。

幽王は犬戎に殺され（前771）、平王は東遷し（前770）、その後秦が東方に進出し、武公元年（前697）には彭戲氏を伐つて華山の下に至り、一一年（前687）には杜・鄭を県としている。寧公の伐つた亳王・蕩氏、そして、武王の伐つた彭戲氏は、いずれも戎の別名である。今秦の獻公の五年（前672）伐つた驪戎もまた戎の別名である。華山の一帯に依然として、戎おそらくは犬戎が居住しつづけたのであろう。

蒙文通氏は、この時晋の兵が河西にまで越え、渭南にまで来るとは考えられないといい、秦本紀に申侯が「昔我先驪山之女、為戎胥軒妻、生仲潘、保西垂」と記しているが、驪山はもと西裔に在って、新豊の地に酈山の名がつけられたのであるうという。いずれにしても犬戎の一支である驪戎がこの地に居つたのであろう。秦がこれを滅して驪邑としたというのは、いつのことか明らかでない。

寰宇記によれば「驪戎故城在東二十四里。殷周時驪戎國地也」といひ、さらに「驪山在東南二里、即藍田山也。温湯出其下」といふ。水経注は三秦記を引いて、「麗山西北有温泉」という。この麗山と連なる山に浮肺山がある。水経注に「冷」水南出肺浮山、蓋麗山連麓而異名也」とあるが、寰宇記は「浮肺山」とし、水経注を引いて「蓋驪山之別麓而有異名也」とする。「別麓」と「連麓」はいずれも山の連なるさまであろうが、山名が浮肺山なのか肺浮山なのか問題である。終南山の別名を地肺山というのもまぎらわしい。

山海経西次一経には「浮山」とある。郝懿行によれば、芸文類聚7引遊名山志に「玉溜山一名地肺山、一名浮山」とあるのはこの山であろうという。然らば水経注の肺浮山よりは寰宇記の浮肺山によるべく、この「肺」は舊史切、音萍・紙韻であつて、その音は符禺山の名を連想させるものがある。さらに言えば、浮肺は符禺即ちブイであつて、彭戯―彭衙を背景と考えることができるからである。

先に引いたように、秦本紀には「彭戯氏を伐つて華山の下に至る」とあるが、そこが彭戯氏の地であるとすると、そこは犬戎が周王を殺したという驪山であり、故驪戎国であつて、またそこに戯山―戯水があり、これも幽王の殺さ

れた地とかかわっている。

寰宇記によると、

戯水在東二十七里、水経注云、冷水出浮肺山、戯水出麗山馮公谷、又北逕戯亭東。

水経注では「渭水又東、戯水注之。水出麗山馮公谷、東北流、又北逕麗戎城東」とある。戯水は麗山馮公谷より出るといふのであるが、麗と戯は似た音であり、さらに「馮公」は「馮夷」の名を連想させるし、しかも、この馮夷の名は、後述するようにこの地に關係が深いようである。「馮」は彭・符・平と通じて用いられるから、符禺とのかかわりも考えられる。「戯」は彭戯、衙にかかわるものと考えられる。

「戯亭在東北三十里、周幽王為犬戎所逐、死於戯、即此也」と、寰宇記興平県の条にいう。魯語にも、幽王は戯に滅んだとするが、その戯は彭戯とかかわるものとするならば、かつてこの辺は彭戯氏の地であり、その名が浮肺山、馮公谷、戯山、さらには符禺の山に残っているのではなからうか、「驪戎」の名も羌族の自称符禺即ちブイを思わせる。

水経経の「又北逕戯亭東云々」の部分は、もと「符石」の下にあつたこと、即ち符禺の水の次にあつたことも考え

合わすべきであらう。符禺の山は、山海經に言うように華山の西にあるとするのが筆者の考えである。

## (一) 河伯馮夷

史記封禪書によると、涇・渭兩水は咸陽に近い故を以て山川の祠に準じて祀られている。

涇・渭皆非大川、以近咸陽尺得比山川祠、而無諸加。

また、泜水・洛水等も小山川の類であるが定期的に祀られている。正義に括地志を引いて言う。

泜水、源出隴州泜源縣西南泜山、東入渭。

洛水、源出慶州洛源縣白於山、南流入渭。

泜山は禹貢の峴、周礼の嶽山とされ、名山であるが、白於山もまた同じく崇尚される山であったのだらう。

同じく封禪書によれば、華山より以西の名川四の筆頭には黄河をあげ、臨晋で祀ると言う。

水、曰河。祠臨晋。

雲隱によれば、韋昭は「臨晋は馮翊縣」と注し、また漢書地理志在馮翊には、臨晋に河水祠があると記す。

臨晋、故大荔、秦獲之更名。有河水祠。

先に記した「祠臨晋」の正義には、括地志を引いて、

大河祠在同州朝邑縣南三十里。

といい、さらに正義は、山海經の氷夷、太公金匱の馮修・

竜魚河図の河伯などのことを引いて、これらが河水祠と関連があるかのように扱っている。太平寰宇記28同州朝邑県の条に「西瀆大河祠」と記し、また馮夷に関する諸説を列挙しているのも、同様な扱い方と見られる。

ところで、史記六国表によれば、秦靈公八年(前417)に、「城塹河瀨、初以君主妻河」という注目すべき記事がある。秦本紀に「厲共公一六年(前41) 塹河旁以兵二万伐大荔、取其王城。(徐広曰、今之臨晋也。臨晋有王城)」とい、六国表、厲共公一六年に、「塹河旁伐大荔」とあるから、「城塹河瀨」とは、「塹河旁」であり、大荔を改めるための橋頭堡かと思われるが、濠を掘るに際し、河神を祀ったものであり、「初以君主妻河」という祭祀が、後には河水祠とされる臨晋で行なわれた。「河旁」とあるが実は洛水の畔であり、しかも大荔を収めることと関連していることも注意される。この風習の羌戎と関係があるかどうか明らかでない。この「初以君主妻河」について、索隱は次のように説明する。

謂初以此年取他女為君主。君主為公主也。妻河、謂嫁之河伯、故魏俗猶為河伯取婦、蓋其遺風。殊異其事、故云初。

河神に対する犠牲として若い娘を公主の資格で河伯に嫁

がせるという行事であるが、この風習は以前からあって、「公主」にしたてて嫁がせることがはじめてであったのか、詳かでない。恐らく女巫が河神に嫁ぐというのが原型であり、国家的祭祀を掌る女巫となれば、公主が当たることになるのであろう。

いわゆる「魏俗」の「河伯娶婦」については、水経注10濁漳水条に次のように記す。

漳水又北逕祭陌西。戦国之世、俗巫為河伯娶婦、祭於此陌。

濁漳水の灌漑に関連し、水神を祭ったもので、鄴県の西に祭陌という所があり、そのいわれを記したものである。戦国初期、魏文侯のころ、西門豹が鄴令となった時、三老（地方長老）たちが河伯娶婦と称し、美女を選んで河に沈める祭儀をしくんで、民衆から金をしぼる風習があり、それを西門豹は淫祠であるとして禁止した。この事については、史記126滑稽列伝の褚少孫補、西門豹伝に詳しい。鄴の三老、廷掾が毎年百姓から数百万の金を集め、二、三万で河伯娶婦の祭儀をすませ、あとは巫祝と残金を山分けしたという。巫が民間から美しい娘を選び潔斎して盛装させ、河畔の齋宮の中、床席の上に坐らせ、それを河に浮かべ、やがて水中に沈める。河伯のために婦を娶ってやらねば洪

水が来るとして人々を恐れさせるのである。

河伯の妻の伝承は、古く楚辭天問にも見える。夷羿が「胡こんぞかの河伯を欺て、彼の雒嬪を妻とせる」とあり、洛水の女神（宓妃）が河伯の妻となっているのを羿が奪ったというのである。文選洛神賦の注によれば、「宓妃は伏羲氏の女で、洛水に溺死して遂に河神となった」という。この洛水は豫州の洛水で、いわゆる伊洛の間は諸戎の本居であり、伏羲の名も伏羲とも書き羿即ち符禺（ここに浮戲山もある）、羌族の自称とかかわるのではないかと思われる。溺死したというのは、河伯の婦としていけにえに供せられたわけである。

天問王逸注によると、河伯が白竜となって水辺に遊んでいるのを羿が射てその左眼をつぶしたという。長狄退治の場合と同様、その魔力を鎮圧する呪術なのであろう。この天問の伝承も河伯娶婦にかかわるものである。

さて、臨晋の河水祠における河伯が馮夷であることは明文はないが、その地が後の馮翊県であり、もと彭戲氏の拠った所であり、彭衙（今白水県）も近く、また大荔戎の大荔のある洛水畔である。先にあげた六国表、厲共公一六年に「塹河旁伐大荔、補龐戲城」とあって、大荔攻撃と共に龐戲城即ち彭戲城（彭衙の地）をあげている。

馮夷の名は、楚辭遠遊、莊子大宗師、史記司馬相如列伝等に見えているが、既に觀念化されており、淮南子原道訓では、馮夷は大丙の御となり雲車を天空に馳せている。穆天子伝の河伯無夷、即ち馮夷の都する所は、陽紆の山とされ、冀州龍門のかなたである。竹書紀年<sup>⑧</sup>帝芬一六年に「洛伯用与河伯馮夷鬪」とあり、朱右曾は、古国に有洛氏（周書史記篇）、河宰氏（穆天子伝）がある、用と馮夷は二国の君というが、詳かではない。

馮夷を實在の人物とするのは青冷伝・搜神記である。青冷伝（文選15張衡思立賦注引）には、

河伯、華陰潼郷人也。姓馮氏、名夷。浴於河中而溺死、是為河伯。

とあり、二〇卷本搜神記には、河伯馮夷について

宋時宏農馮夷、華（陰）潼郷隄首人也。以八月上庚日渡河溺死。天帝署為河伯。又五行書曰、河伯以庚辰日死。不可治船遠行、溺没不返。

と記す。兩者概ね同じで、所は潼関の黄河激流の辺で、八月上庚、あるいは庚辰に溺死したという。その日は斎浴する忌みの日であり、舟に乗ってはならないとする民俗にかかわっている。竜魚河図（御覽81）では河伯公（姓呂、名子）夫人姓馮、名夷君とあり、馮夷は妻の名、夫は河伯公

であるのは河伯娶婦の痕跡をとどめている。要するに、河神にいけにえを捧げる祭儀があつて、それを背景として馮夷は溺死し、河伯となるという伝承が生じたのであろう。卜辭にも河水の祟を禦ぐための祭祀に三十羌をいけにえにしたとあるという<sup>⑨</sup>。

ここで注意したいのは、「華陰潼郷」という地名である。水経注4河水の「華陰潼関」の条に潼関のあたり、松果山より出る澗水が北流して通谷をすぎ、通谷水といわれるが、述征記では潼谷水というところがある。通・潼は普通である。「或説因水以名地也」とあるが、この付近を潼郷とするなら、洛水が渭水に注いでさらに黄河と合流する渭汭・潼関の地と臨晋の河水祠の地とはあまり遠くない。そこに河伯馮夷伝承があることは、河水祠と馮夷とのかかわりを思わせるに足る。

博物志で、夏桀の時、東方の輝く太陽と西方の沈む太陽を殷と夏に見立てて説明している馮夷の名も、この地の影戲にかかわるのではなからうか。

さらに華陰県に「平舒城」があり、水神の説話が伝えられている。水経注の渭水では、まず「豊水」条の鄜池に關連して、華山君の使いが咸陽に帰る人に手紙を託して鄜池君に届けさせる話を記し、また同じく「鄭鼎」条の平舒城

に関連して、江神が華山下に道をとり、平舒道で、前年秦始皇が沈めた璧を渡して返させたという話を記している。あとの話は、秦始皇本紀「華陰平舒道」正義引括地志でも、水経を引いて述べられている。

春秋後伝の話の方が説話としてはととのつており、いわゆる河伯使者型の原型に近い。池畔に梓樹を叩けば謁者（取次ぎ）が現われ、水神府に導かれ、運命を予知したり、宝物をもらうのである。唐の伝奇にも類話がいくつかあり、戴孚の広異記に収められている李朝威の柳毅伝（太平広記四引）は、その代表的なものである。涇川神の妻となつた竜女が、夫の冷遇を訴える手紙を柳毅に託し、洞庭竜君に届ける。また、太山府君から託された手紙を河伯に届けるといふ搜神記4胡母班の話では、娘は河伯の婦で、明らかに「河伯娶婦型」をふまえている。

水経注38溱水条に、観岐という絶崖下に神廟があり、激湍に流木が浮かぶのを河伯下材とよぶという話も、河伯使者型である。「洛」から帰る時手紙を託せられるのであるが、「洛」は雒陽というより、洛水—華山神にかかわるのが原型に近いであろう。泰山は冥府として華山から転じたものである。

華山にも河水祠にも近い華陰の地が河伯と結びつけら

れ、その舞台が「平舒」とされているわけであるが、それは「彭衙」につながる地名である。舒・衙ともに魚韻で通用、平模—彭亡の転<sup>21</sup>から明らかである。さらに華山西南の符禺山、華山下の彭戲氏を考え合わせると、河伯馮夷は、これらと共通の音と見られるし、河伯は臨晋の河水祠（彭衙—彭戲氏の地）にかかわるのである。

なおつけ加えておきたいことは、北山経三の「蒲夷之魚」と彭祖之山の「肥遺」という蛇である。肥遺については別稿でふれたが、西山経一の太華之山には「肥遺」という六足四翼の蛇が居り、同じく英山には「肥遺」という黄身赤喙の鳥が居り、隄次之山には「橐𪔐」（橐𪔐即ち肥遺に同じ）がある。蒲夷も肥遺に通じ、英鞮之山の「冉遺之魚」（冉は弗の訛か、蒲と無と近く、夷、遺は声同じ）も肥遺に通ずる。このように（英鞮之山を除いて）、雍州に肥遺の名をもつ動物が見受けられることは、これまた符禺即ち彭衙、さらには彭戲氏の関連語と言えるなら、河伯馮夷もこれにつながると考えられる。

（大阪成蹊女子短期大学）

（注）

本稿は、「山海経に見えたる『符禺之山』に関する論稿の第三章第四章に当たる。第一章「彭亡山と彭祖」第二章

「符禺之山」については、寺岡竜含博士古稀記念漢文学論集に寄稿。また本稿につづく「防風氏と封岫の山」が日本中国学会報第三十三集に掲載される予定である。

- ① 牙含章氏：関于「吐蕃」「朶甘」「烏斯藏」和「西藏」的語源考証（民族研究第4期）○孫宏開氏：歴史的氏族和川甘地区的白馬人—白馬人族属初探（民族研究第3期）
- ② 拙稿「彭亡山と彭祖」・「符禺之山」・「洛水について」（三）嵩高山・浮戲山・馬嶺山
- ③ 白川静氏：羌考甲族考（甲骨金文学論集）
- ④ 「索隱」河内、河曲也。内音納。
- ⑤ 太平寰宇記28白水県
- ⑥ 郡国県道記によれば衙城の側に柳谷水があり、これが彭衙水で南流して鼎治の北で洛水に合する。（寰宇記28白水県）
- ⑦ この項は、白川静氏：金文の世界、中興の挫折と崩壊P243、P248参照
- ⑧ 郭沫若：两周金文辞大系放积143兮甲盤
- ⑨ 王国維：鬼方昆夷玁狁老（觀堂集林13）
- ⑩ 郭沫若：两周金文辞大系放积106不嬰斝
- ⑪ 毛詩出車序「西有昆夷之患、北有玁狁之難」
- ⑫ 蒙文通氏：周秦少数民族研究P26昆夷与羌族
- ⑬ 王国維：鬼方昆夷玁狁考（觀堂集林13）
- ⑭ 地理志に、漢高祖が故郷豊になんで新豊を作ると。
- ⑮ 蒙文通氏：周秦少数民族研究P25秦即犬戎之一支

- ⑯ 白於山も符禺山と音が通じ、羌族の山である。拙稿「白於之山」
- ⑰ 竹書紀年帝堯陶唐氏「五十三年帝祭于洛」（初学記引）尚書中候では「堯率群臣東沈璧于洛」、後述の秦始皇沈璧、江神を祭る例もあり、左伝僖28に、夢に河神が玉を与えると楚の子玉に言った話が見える。
- ⑱ 王国維今本竹書紀年疏証上
- ⑲ 朱右曾竹書年輯校訂補（朱右曾輯本、王国維訂補）
- ⑳ 白川静氏：羌族考P571（甲骨金文学論集）
- ㉑ 拙稿「彭亡山と彭祖」参照 ○彭蒙—彭望—彭亡—彭模—平望—平無—平模と転じ、後漢書47岑彭伝には、彭亡は平無に転じている。
- ㉒ 拙稿「鮒魚之山と肥遺」（二）肥遺